

始



特



一坪で出来る

蔬菜栽培法

特100

12



序

種を蒔いて、時節を待てば、獨手に蔬菜は生長するも
 のと思ふのは間違ひである。蔬菜栽培には、蔬菜栽培
 の秘訣がある。地味の如何、種蒔の時期、肥料の選擇、其
 等の一つを閉却しても、蔬菜栽培は失敗に終る。樂
 しく作る猶、額大の蔬菜園にも、種々雑多の経験と
 が必要である。新鮮な蔬菜には、新鮮な活氣が
 居る。新鮮な蔬菜を食つて、大いに活動せんと
 人は、此本を買つて、蔬菜の栽培を試みずには
 らない。云爾。

四十四年九月

編

者



蔬菜栽培法目次

第 一	漬菜類の栽培法……………	(一)
第 二	葱の栽培法……………	(三)
第 三	野蜀葵の培栽法……………	(六)
第 四	塘蒿の栽培法……………	(七)
第 五	菠薐草の栽培法……………	(一一)
第 六	蒿苣の栽培法……………	(一二)
第 七	花椰菜の栽培法……………	(一五)
第 八	甘藍の栽培法……………	(一六)
第 九	大根の栽培法……………	(一九)

第十 燕菁の栽培法……………(二四)

第十一 胡蘿蔔の栽培法……………(二七)

第十二 午莠の栽培法……………(二九)

第十三 甘藷の栽培法……………(三〇)

第十四 馬鈴薯の栽培法……………(三五)

第十五 芋の栽培法……………(三九)

第十六 菊芋の栽培法……………(四二)

第十七 王葱の栽培法……………(四三)

第十八 大豆の栽培法……………(四六)

第十九 小豆の栽培法……………(四九)

第二十 豌豆の栽培法……………(五〇)

第二十一 蠶豆の栽培法……………(五三)

第二十二 菜豆の栽培法……………(五四)

第二十三 枝豆の栽培法……………(五七)

第二十四 刀豆の栽培法……………(五八)

第二十五 茄子の栽培法……………(五九)

第二十六 西瓜、南瓜、とうもろこし其他瓜類の栽培法……………(六二)

第二十七 茗荷の栽培法……………(六八)

第二十八 ぶどう土當歸の栽培法……………(七〇)

第二十九 蔞の栽培法……………(七四)

第三十 蓮根の栽培法……………(七六)

第三十一 蕨姑の栽培法……………(七九)

第三十二 水芹の栽培法……………(八二)

第三十三 蒟蒻の栽培法……………(八三)

目次終

一坪で
出来る
蔬菜栽培法

第一 漬菜類の栽培法

(一)用途と種類 漬菜は秋の末から冬にかけて收穫する蔬菜であつて、我國の食事に實に必要缺くべからざるものである。そして漬菜には種類が非常に多く、白菜、山東菜、朝鮮白菜、山東白菜、三河島菜、體菜、小松菜、京菜、芥子菜など十數種もあるが何れも其用途は鹽漬にして副食物として用ゐられる。漬菜は殆んど何れの土地にでも出来るものであるが、殊に少し濕

りの多い砂壤土に最も適當するのである。

(2)栽培 漬菜を栽培するには畦巾二尺にして條播とするので、尤も結球して大きくなる種類には二尺五寸から三尺の畦巾にする。種子の蒔き時は小松菜以外のものは九月上旬である。小松菜は一年中何時でも蒔き付けるものであつて、通常は八九月から十一月まで順次蒔き付け春季二三月頃までに收穫するのである。肥料は元肥として種蒔の時、堆肥、過磷酸石灰、灰、及び人糞尿を施して後に又人糞尿を追肥として幾度か施すがよい。又二回位間引きを行つて、株間を四五寸乃至一尺位にすべきである。中耕や除草は怠らないやうにすることが必要である。

(3)採種 種子を採には完全なるものを取て移植せねばならぬ。移植の時期は普通の漬菜は十一月上旬から十二月下旬までに行

ふべきである。畦巾は品種によつて多少差があるが、三尺位にして株間は、一尺五寸乃至二尺となし直立に植ゑる三月下旬から四月上旬になると、花が開く五月上旬になると鞘が充分に熟して脱落するから、上部に熟しない内に刈り取つて日かげ干しとして貯ふがよい。

第二 葱の栽培法

(1)用途及品種 葱は我國では古くから作られてる。何處へ往つても幾部分之れを栽培しない所はない。葱は煮て食べるが普通であつて、生で食べることもある。葱の品種は澤山ある。今其主なものを擧げて見れば、千住葱、下仁田葱、岩槻葱、飛彈葱、九條葱、夏葱、冬葱などである。

(2) 栽培 葱は粘質壤土若くは表土深き、輕鬆な、火山土などよ
く、著しく乾燥しない地に最もよく適する。種子を蒔くには先づ
畑中の膨軟な場所を選んで床場を設くべきもので、畦巾は三四尺
長さは随意で充分に土壤を碎粉いた後人糞や堆肥を施し少しく土
を被ふた上に撒し蒔きをするのである。十坪に對して二合乃至三
合の種子を蒔き付ければよい。蒔き付ける時期も、採收する時期
に由つて一様でない。冬季より春季にかけて採收しやうとするば
三月中旬頃に種子を蒔き付ける。秋より冬に採收しやうとする
には六月下旬乃至九月中旬頃までに種子を蒔き付けるのである
葱は春、夏、秋の何れに種子を蒔くも妨げはないが、其最も良好
なのは春、種子を蒔き付けることである。既に種子を蒔き終はれ
ば薄く土を被ふせて、更に糞の如きものを敷き地の乾燥を防いで

若し乾き過ぎれば水を注ぐのである。發芽したならば直ちに葉を
取去るがよい、其後度々除草をなし、密生する所は間引いてやる
苗が長さ九八寸乃至一尺二三寸に伸びた頃本畑へ移し植えるので
ある。本畑は二尺五寸乃至三尺とし、深さは七八寸乃至一尺の溝
を掘り溝の一侧に沿ふて二寸置きに一本又は四寸置きに二三本宛
に苗を植る付け土を以てよく根を被ひ溝の他の測に沿ふて苗に接
觸せぬ様に元肥を施し僅かに土を被ふのである。尙は麥稈を其根
際を被ひ置くのである。かくして凡そ三十日許り経て葱苗の元氣
を生じた時に第一回の追肥を施して後二三寸許り土を被ひ、更ら
に三週間を経たらば第二回の追肥を與へるのである。肥料は移植
前に基肥として施すよりも、移し植えた後に與へる方が利益であ
る。これは葱は根を下方に伸ばさないで却て上方に伸びるからで

ある。肥料として用ゐられるものは堆肥、人糞尿、干魚等である。殊に窒素質の肥料が貴ばれてる。

(3) 收穫 播種の時期によつて收穫の時期が異なるが普通は春播きは六月から九月まで、秋蒔きは五六月乃至十月頃收穫が出来るのである。夏蒔きは十一月乃至四月までに收穫されるのである。收穫したならば上等なものは枯葉を剥ぎ根を切り、普通は百本位、目方なれば二貫五百目位を一束とし白根の基と葉の基とを二ヶ所位束ね更に其外部には糞などを當て、束ねるがよい。

第二 野蜀葵の栽培法

野蜀葵は稍々濕り氣のある肥沃な土地によく出来る。此れを栽培するには四月乃至五月 上旬頃になつて適當の土地を選んで整地

し、二尺隔の播條に設け、一反歩に二百五十貫許りの割合で堆肥を施し、土を少し被ぶせ其上に水肥を施し、一反歩に對して種子三升を條播して薄く土を被ぶせる。更らに乾燥を防ぐ爲めに糞などを被せて置く。こうすれば五六日乃至十日位で發芽するか直ちに被ひものを除去するのである。發芽した後二週間も過ぎず、種苗が稍々發芽した時に、下肥を施して中耕を行ふ。其後二三週間を経れば除草を行ひ、再び前と同様な液肥を施して中耕をする。秋になつて數回根元に土を盛り寄せ軟白させて收穫するのが普通である。

第四 塘蒿の栽培法

塘蒿は常に適當な水濕と冷涼な氣温の下に最もよく發育するか

ら、輕鬆な土地よりも水分の保ちのない粘質土か粘質壤土がよい。要するに塘蕎は肥沃で表土が深く且つ幾分濕氣を含んだ地を好むものである。

塘蕎を栽培するには先づ苗床を設けなければならぬ。床は甘藍と同様で巾三尺、長さ適宜にして苗床を作り、撒播して僅か土を被ふて置く。種子は五月の中旬頃が普通である。早く收穫しようと思ふ時には、一二月頃温床を設けて種子を蒔き薄く土を被ふせて置くと、二三週間も立てば發芽する。發芽して苗が稍々發育した時に間引きをする。二枚目の眞葉が充分に開いたならば、丁寧に苗を掘つて他の床に移植して春暖かになつた時に畑に植付ける。かくすれば夏の初め頃に收穫が出来るのである。けれども温床を用ゐないで栽培するには、三四月頃冷床を作つて種子を丁寧に

蒔き付ける。種子を蒔いたならば薄く土を被ひ、更に藁を以て床面を被ふがよい。發芽後眞葉二枚開いた頃他の床に二三寸を隔て、植付ける。五六寸位に成長したならば畑地へ移し植ゑてよい。畑地へ移し植ゑるには丁寧に整地して、畦巾は適宜にし其底へ堆肥を入れ、少し土を被ふて六七寸隔に苗を植ゑ付ける。其植ゑ付けは五月下旬より六月中旬頃迄の間に行ふが普通である。塘蕎には四つの軟白する方法がある。今簡単に二つ許りを述べることにする。

(1) 板圍軟白法と云ふて、二尺乃至二尺五寸隔に巾一尺二三寸、深さ一尺位の植ゑ溝を掘つて堆肥を入れ一尺隔てに苗を植ゑ付ける。植付けた後二回薄い水肥を施して漸次成長して丈が一尺二三寸位になつた時、巾一尺位の板を株の兩側にあて板の上側の

距離は二三寸として横木を打ち、上面は葉で被ひ、莖の部分に光線が入らぬ様にするのである。約二十日許り立つと莖の緑色の部分が軟白する。此法は冬は不適當であるが、夏期には仕事が容易で便利である。

(2)は土寄軟白法で、畦巾二尺五寸乃至三尺、深さ五六寸の縦溝を設け、此れに肥料を施し、四五寸隔て、苗を植付ける。十月頃になると土寄軟化に適する太さになるから、外葉を集めて、上下二ヶ所位叩蕪を以て束ね土寄を容易にする。次ぎに畦間を鋤き起し土塊を碎き、株の兩側より深く土を寄せ、葉柄を全く被ふのである。此の如くして置くと一ヶ月位でよく軟白する。然る後順次採收し始めるのである。

第五 菠薐草の栽培法

栽培 菠薐草は春と秋の二度に種子を播くことが出来るが、秋九月から十月頃に蒔くのが良いとしてある。種子を蒔くには畑をよく整地して畦巾を一尺五寸乃至二尺として之れに條播して土を被ふせる、十日位立つと發芽して發育し始めるから、其後十日許り立つて幼苗が稍々發育した頃除草を行ひ追肥を施して中耕をするがよい。菠薐草は間引きを行はないうで密生させるのが普通であるが、餘り密生其度に過ぎると發育が不充分であるから、發生の模様によつては適宜に間引く方が適當なやり方である。第一回の追肥を施した後、二週間許り立つて再び追肥を施し、中耕を行つて適當の大きさに達したものでから漸次收穫する。

第六 高苜の栽培法

(1)種類 玉ちさ、立ちさ、縮細ちさ其他色々な種類があるが、大したものではないから省略する。冬、春に高苜を收穫しやうとすれば豫め秋季彼岸後に種子を蒔いて苗を養成しなければならぬ。然し寒い地方では冬季苗の越冬することが六ヶ敷いから木框か、温床の内に栽培しなければならぬ。暖地では秋蒔の高苜は本葉が數枚發生すれば之れを定植するがよい。然る時は早生種は十一月より晩生種は十二月より一月の候になつて結球して採收に適する様になる。木框によつて苗を仕立てるには先づ木框の床を設けて此れに厚薄なき様に種子を蒔いて種子のかくれる位まで肥土を篩ひかけ、其上を板で軽く押へて鎮壓して置くがよい。種播

の季斯は二月下旬乃至三月上旬で種子を蒔くことが出来る。種子は凡そ一週間で發芽する。發芽して苗が次第に密生に過さる様になれは間引きを行ふて各苗の距離を一寸内外となし苗に充分な空間を與へてよく發育させる。其後二番目乃至三番目の眞葉が開く頃になれば再び密生して來るから此期には移植鋤を以て丁寧に掘り取り五六寸位はなして再び冷床に假植する。
(2)栽培地 栽培地は丁寧に整理して二尺内外の畦巾として播條を設け之に蒔き付け發芽後間引きを行ひ移植に適する大きさに達した頃全部の苗を抜き採り他に移植し一部のものには適當の株間に残し置くのもよい。直播したもののは凡そ一週間を立てば發芽する。苗が漸次發育して密生する様になれば間引き其後薄い速効の肥料を施し中耕を行ふて其後二回許り間引き追肥を施し中耕を行ひ最

後に各株を六七寸乃至一尺位にして充分に發育させるのである。苗が四五枚の葉開いた頃移植して根付いた後一回其後二三週間を経一回追肥を施し中耕を行ふ。種子を蒔いてから凡そ六七十日立てば成熟する。肥料は元肥として定植の際又は直播の時堆肥、人糞尿、過磷酸石灰などを施し追肥には人糞尿の稀薄にしたものか或は硫酸アムモニアの水溶液などを二回に施すがよい。(3)收穫 玉ちさ、立ちさは球となし充分に發育した頃切り、葉ちさも亦充分に發育した後抜き採るが、普通のちさは丈けが稍々伸び葉が充分な大きさに發育すれば下葉から掻きとりて收穫するのである。

第七 花椰菜の栽培法

花椰菜は甘藍と同様に苗を仕立て、畑地へ定植するのである。花椰菜を栽培する畑地はよく耕耘して、腐熟した堆肥を多量に鋤き込んで整地をするがよい。一般に秋蒔きは畦巾二尺株間一尺二寸、春播なれば畦巾二尺五寸株間一尺五寸とすれば充分である。元肥としては多量の窒素質肥料殊に油粕は最もよい。此れに過磷酸石灰や灰などと混じて用ゐるがよい。秋蒔は十一月又は十二月に幼苗を植え付け、春播は五月頃になつて植付けてよい。植る付けた後は乾燥することを忌むから、天氣が永く続く時には、中耕と灌水とを行はなければならぬ。斯くして秋蒔は翌年の春三月に、春蒔は十一月になつて中心部に始めて小さな花蕾が出来る。此れが

出来てから一ヶ月立つと採取して差し支ない。

第八 甘藍の栽培法

甘藍は最も早く傳はつた西洋蔬菜であつて肉類と煮て食へ或は生で三杯酢漬にし又は鹽漬にして食べるので、其味は非常に良い。今は全國に廣く栽培されて重要な蔬菜となつてゐる。

(I)種類 甘藍は其種類頗る澤山あるが、普通に栽培されるものは、球葉甘藍と、花椰菜、球莖甘藍とである。球葉甘藍の一種で葉の腋毎に小さい葉の玉が出来る者がある之を子持甘藍と云ふ。氣候と土壤 甘藍は寒地に適するものであるから北海道では最も良いものが出来る。暖地方であると成長し過ぎて葉が開き莖が伸びるから屢々植る替へをして矮くするのである。又土地は表層が

深くつて肥沃で餘り乾燥しない粘質土壤若くは砂質の土壤を好むのである。

(2)栽培 種子を蒔き付けるには普通秋九月下旬乃至十月頃と春三月頃との二度である。種子を播くには苗床を先づ準備する必要がある。さて苗床は巾四尺、長さ適宜にして土をよく軟かくして其上に堆肥を敷き其上に篩を通した土をかけ人糞尿を施し再び篩土を被ひ表面を平にするのである。かくして床が出来たならば種子を非常に疎らに距離一二寸位に撒播して藁で蓋をして置くのである。發芽して本葉が二枚出た頃第一回の移植を行ふので之も前と同様にして床を作り間隔四五寸として基盤の目の如く移植するのである。次に第二回の移植は葉が五六枚出来た時に行ふものであつて、秋蒔甘藍であると翌年の春である。翌春三四月頃又は十

月頃つづみに本畑ほんばたに本植ほんしょくするのであつて、本植ほんしょくするには町寧ていねいに整地せいちして畦巾しきんを二尺にじふ乃至二尺五寸位にじふごせんばい、株間かぶまを一尺しちふ乃至二尺位にじふばいとなして元肥もとこを施ほして、土つちを被かせて植うを付つけるのである。肥料こやしとしては充分じゅうぶんに腐熟ふじやくした堆肥たいひ、人糞尿じんふんね、過磷酸石灰くわりんさんせきくわい及び灰はい等を適宜てきぎ配合はいごして施ほすがよい、四月中しがつちゆう旬じゆん又は十月上旬じゅうがつじゆうけんに補肥ほひとして人糞尿じんふんねを數回すうかいに施ほすのである。甘藍たまなは頗すこぶる多量たうりやうの肥料こやしを要えするもので到底たうてい肥料こやしを措そんで充分じゅうぶんに結球けつきうさせる事は六ヶ敷むつがしきい。(3)收穫及貯藏とくわい甘藍たまなの收穫時とくわいじは春はるは六月下旬ろくがつげふん、秋あきは十月中旬じゅうがつちゆうけんであつて若し之これを貯藏ちゆうざうするのならば根ねと共に拔ひき採とつて一個所いっかくしょに密みつに植うゑ込み雨あめとか霜しもとかの損害そんがいを受けうけない様ように藁わらで被おひ時々ときとき日光ひかりに當ある様ようにすると永ながく貯藏ちゆうざうすることが出来る。

第九 萊菔(大根)の栽培法

(1)用途 煮に或あるは蒸ひして食しするものであるが、又生またなまで食しするものもある。其外そのほかに乾燥かんさう又は鹽漬しほづけにして日常にちじやうの副食物ふくじよくぶつとして必要ひつやうのものとなつてゐる地方ちほうによつては米こめと共に炊煮たきして常食じやうじよくを助たすくることと尠すくなくない。

(2)品種 主おなる各品種かくひんしゆを舉あげると次の如ごとくである。

(一)練馬 東京府豊島郡練馬村とうきやうふとしまぐんねりまむらの産さんであつて、早種さうしゆと晩種ばんしゆとの別べつがある。早種さうしゆを尻詰しりつまつ(シリツマツリ)と云いひ、晩種ばんしゆを尻長しりながと云いふ、尻詰しりつまつは長さ大抵二尺許たいていしちふほりで頸細くびほそく、末すま、圓大まんだいで細長ほそながき尾おがある。軟やわかで美味みづかで煮にて食しするに適てきしてゐる。亦また糠漬ぬかづけとしてよい。尻長しりながは澤庵漬たくあんづけとなしてよいが、煮食しやくじよくは宜よろしくない。

(二)宮重 愛知縣西春日井郡宮重村の原産で、多汁で味極めて美である。煮食並に糠漬に適して居る。

(三)方領 愛知縣海東郡方領村の名産で、肉軟く味佳なるも宮重には及ばない。

(四)聖護院 京都府愛宕郡聖護院村の産で、煮食に適して、味の美なる事方領に優つて居る。

(五)櫻島 廣島縣櫻島の名産で、根の肥大なることは他に比がない程である。肉最も脆軟で、味の甘美なる大根中一番である。最も煮食に適して生食、切干にも適してゐる。

(六)長良 一名守口と云ひて、岐阜縣稲葉郡島村の産である。質は堅實であるけれども、辛味と苦味とを有つて居る。煮食には適しない。

(七)二年子 一名三月大根と云ふ。肉は白色多汁であるが、辛味が甚だしい。

(八)夏大根 風味は二年子大根に似て他に大根のなき時期に收穫する事が出来るから、自家用として作つてよい。

(九)時無 四季共に栽培することが出来る。専ら酢漬若くは糠漬として用ゐる。

(十)龍井戸 一名於多福大根と云ふ。風味よく、糠味噌漬として良い。

(3)氣候及土壤 温和なる氣候を好んで、土壤は耕土が深く膨軟で肥沃な深き沖積壤土、若くは火山灰質土壤がよい。

(4)栽培 凡て土地は出来る丈け深く耕して丁寧に整地をするが肝要である。之に作を切つて種子を播くのであるが、其播き方に

條播と點播とある。畦巾及び株間は品種によつて異なるは論を俟たない。秋大根は何れも大きく成長するから、點播にするのである。櫻島大根の如き巨大なるものは、作間も株間も共に三尺位にし、方領大根は畦間を三尺、株間二尺五寸許とする。練馬大根は畦間を三尺、株間を一尺二三寸を以て普通とする。然し其他の二日大根、時無大根などの如く小さい種類にあつては畦巾三尺にして條播するがよい。點播する時は一株に七八粒位を播き後に間引きして一株一本とする。又條播にした大根であると後に間引きして成長の都合のよい様に適當な距離にするのである。種子を播く時は堆肥、灰、過燐酸石灰を調合した肥料を元肥として施し、其側に種子を播いて土を被ぶせるのである。秋大根の播種期は概ね八月乃至九月であるが、氣候の寒冷な地方では七月下旬から

下種する處がある。夏大根は春三四月頃で、時無大根、二年子大根、二十日大根は春から秋にかけて何時でも播き付けてよい。(5)肥料 肥料としては人糞尿、油粕、魚肥、糞灰等を施し一反歩に付き窒素三四貫匁、燐酸一二貫匁、加里を三四貫匁を施すがよい。普通は元肥の外二三回追肥を施與するが良い。大根は播種した後兩三日を経れば發生する。其後二三寸に成長する迄に間引きを行ひ、最も健全なるもの一本を各株に残して附近の土を和らげ之れに培ふがよい。其後は尚ほ一回の中耕を行へば良い。(6)收穫 收穫の時期は品種により、又種々なる事情に依つて差異があるが、概して十月下旬より十二月上旬迄とする。一般に生食用のものは風味を貴んで、稍々早く收穫することがあるが、澤庵大根又は干大根にするものは充分に充實させて收穫するがよ

生食用の場合と雖も、長く之れを貯藏しやうとするには、十分に充實させなければならぬ。

第十 蕪菁の栽培法

(一)品種 品種は夥多あるが今其重なるものを擧ぐれば左の如くである。

(一)近江蕪 滋賀縣滋賀村の名産で白色巨大である、軟かで風味がよい。煮食並に千枚漬、酒粕漬等として佳である。之れは強く煮ても形がくづれないから風呂吹用にされる。

(二)聖護院蕪 白色扁平で大きい。京都の愛宕郡聖護院村の名産で、元來近江蕪より變化したものだと言ふ。

(三)天王寺蕪 大阪府下天王寺村の名産で白色で殆んど球形を

してゐる。主として煮食するが又鹽漬、糠漬としてもよい。

(四)長蕪 白色で上部は淡綠色をしてゐる、東京地方に多く栽培されて煮食してよい。

(五)小蕪 白色で球形に近い。煮食して風味がよい。

(六)夏蕪 白色で天王寺蕪によく似てゐる風味がよい。

(七)緋の蕪 皮と肉は共に紅色で、軟かで殊に漬物用に用ゐられる。糠漬の糠を加へて鹽藏すると全體が紫紅色となつて美麗で、風味がよい。

(2)氣候及土壤 蕪菁も亦大根と同様に温和な氣候がよい。土壤は略ぼ大根と同じく、砂土に於ては根の形稍々小さいが味がよい而して輕鬆な肥沃な土地は根の肥大したものが得らるゝが味はよろしくない。

(3)栽培 播種の時期は品種によつて一様ではないが早いのは七月下旬から始め、晩いのは九月下旬に及ぶ。整地はなるべく町幅に深耕するがよい。畦巾は普通二尺位で根の大きいものを得やうとするには二尺五寸の畦巾を要する。株間は七八寸乃至一尺五寸とす。根の大なる者は点播とするが便である。各格六七粒乃至十粒の種子を蒔き発生後漸次間引いて適度の距離にする。根の小なるものは條播として発生後漸次間引きて適宜の距離とする。中耕と除草は間引きの都度行ふがよい。燕膏の所謂根は地上に露出して發育するのが通常であるから、土寄は中耕の際眞の根邊に培ふに止め所謂根には土壤を被ふてはならぬ。

(4)肥料 肥料は略ぼ大根と同様で元肥として堆肥に人糞尿や過燐散石灰を配合したものを施し、追肥としては人糞尿を稀薄して

數回施すがよい。

(5)收穫及收量 種類により播種期の異なるに従つて收穫の時期に異なるが早種のもの九月月上旬より晩種は翌年一月に至る。收量は品種や土質によつて一様には行かぬが、一反歩に對する收量は三四百貫が普通であるが良好なる場合には一千貫に達することがある。

第十一 胡蘿蔔の栽培法

(1)品種 瀧野川、金時、札幌、三寸などが多く栽培されてゐる種類である。

(2)栽培 栽培する畑は充分に深く耕し、よく土を碎き、地拵へをして、一尺乃至二尺の畦を設けて條播するのである。胡蘿蔔は

六月乃至七月に種子を蒔き付けるのである。元肥としては堆肥、人糞尿、過燐酸石灰、灰などを適宜に配合して施し、作條を作つて種子を蒔き付けるのである。此際注意しなければならぬ事は種子の粒が極めて細かいから、土の被ふせ方が厚過ぎると發芽が困難である。夫れ故、叮嚀に土を碎いて二三分の厚さに土を被せなければいけない。種子を蒔いてから十日位も立てば發芽する。而して二枚目の眞葉が出た頃間引きを行つて、大凡二寸位の距離にする。尙其後二週間も経つたならば、再び間引きを行つて、株間を適當の距離にして追肥を施すがよい。

(3) 收穫 採收するのは適當の大きさに發育したならば漸次に掘り採るのである。先づ冬季霜が結ぶ前に採收すればよいのである。

第十二 午莠の栽培法

(1) 品種 瀧野川、砂川、大浦、梅田、堀川(二各大和) 札幌、千代島などは其主なるものである。

(2) 栽培 畑地をよく整地して、秋午莠は普通二尺、株間一尺乃至一尺五寸にして、種子は二月上旬から五月上旬頃に蒔くのである。夏午莠は畦巾一尺四五寸、株間一尺から一尺二三寸である。月下旬から十月中旬に種子を蒔き付ける。堆肥へ灰や過燐酸石灰を調合した肥料を元肥として、其側に五六粒乃至十粒の種子を點播して三四分厚みに土を被ふせる。かくして一週間乃至十四五日も立てば發芽する。發芽してから十四五日経てば、間引きを始めてよいのである。間引きの際丈夫で完全なもの二本位つゝ残し

て置いて、あとで一本立てとするのである。其後は時々中耕や除草をなし、又補肥として二三回人糞尿を施すがよい。

(3) 收穫 收穫は春蒔いたものは十一月月上旬から十二月上旬に收穫し、秋播したものは六月下旬から七月中旬頃採收してよい。午蒔は深く地中に入つてゐるから、午蒔掘りと云ふ特別の農具で根の周圍を掘つて引き抜くのである。

第十三 甘藷の栽培法

(1) 用途 甘藷は甚だ味が甘く、加之澤山に出来るものであるから、暖かい地方は勿論のこと、關東地方にも澤山に作つて盛に食用とするのである。之を食べるには之を蒸し、又は焼き又は裁片となして乾燥し置き、米に混ぜ入て炊いて藪飯にする方法もある。

藪から造るものには焼酒の外、澱粉、飴、酢、味噌、醤油、麵類などがある。

(2) 品種 甘藷の品種は非常に多いのであるが、其主なるものを挙げると、紅赤藷(一名河越藩と云ふ)、四十日藷、九州藷(一名三年藷)、ボケ藷、白藷、屋久島、薄赤藷、人參カライモ(一名赤屋久島)、琉球唐藷、熊野藷、唐藷、大師藷、赤唐藷、高須などである。

(3) 藪苗 藪は温暖な所に置くと其表面から澤山の不定芽を出して發育して蔓になるものである。甘藷を繁殖するには一般に塊根より發生した蔓を一尺位に切つて、之を苗として畑に挿植するのである。それ故此藪苗の健全なものを作ることが最も大切である。苗を作るには暖い地方では極めて簡單であるが、低溫の地に

至るに隨て複雑になる。琉球の如き地方であると、温暖なために甘藷が一年中成育してゐるから、一年に二三回畑にある莖を切つて之を苗として植ゑ付ける事が出来る。又九州南部に於ける海岸の暖地では、人形伏と稱して春暖の候、畑地へ適宜の距離に藪を縦に植ゑ、蔓が四五尺に伸びた時に之を一尺位に切斷して植付ける。或は又堆肥の類を施し三月中旬頃種藪を畑地に稍々密に伏せて置くと、新芽が叢生して七八寸に伸びた時に、此芽を掻き採つて苗として移植する法もある。然し氣候の寒い地方では是非とも温床の設備が必要である。それには三月中旬頃南向の暖地を選んで幅六尺許り、長さ適宜、高さ一尺七八寸の藪園を拵らへて、其中に落葉、塵芥、厩肥などの混合物を約八九寸堆積し、其上に腐敗した堆肥を五寸許り入れ、互に接觸せぬ様種藪を植込ん

で、其上に麥稈の類を被ふこと二寸餘とし、又其上に藪を被ひ、更に筥を以て家根形の被を設けなければならぬ。但し暖かい日は此れを除き、諸發芽すれば藪を除くのである。新芽が延びて七八寸となつた時に切つて苗とするので新芽は續いて伸びるから、數回に切つて苗とする事が出来る。

(4) 栽培 苗の準備が出来たならば、五六月中に畑に苗を植ゑ付ける。前作物を收穫した後であるときは、よく整地することは他の畑作物と同様である。畦巾二尺乃至二尺五寸とし、株間は一尺位にするが普通である。或は四尺位の畦に中部一尺を距て、二條の植溝を切り之に苗の先を相對させて植ゑ付ける法もある。之れを拜み植と稱する。苗を挿植するには苗を釣針の形に曲げ、植込むがよい。只斜に挿すと藪に大小が出来て不揃となる恐がある。

(5) 肥料 肥料は凡て元肥として與へるので、腐熟した堆肥、人糞、糠、餅粕、油粕、過燐散石灰、木灰、骨粉などを土地に應じて適合して適宜に用ひふるである。移植後一二回中耕、除草を行ひ、莖が次第に延びて其筋から根を發生する頃になると、蔓返しと云うて、一二回蔓を引き上げて裏返して根が地中に入ることゝ妨げるのである。蔓返しは收穫までに三四回行ふべきである。

(6) 收穫及貯藏 早きは七八月より行ふけれども、普通は十月末頃で塊根を充分に發育させる。一二回霜に合つて莖葉が萎れて枯れた時に莖を刈りとりて、丁寧に諸を傷けない様に掘り採るのである。一時に掘り上げた諸は翌年二三月頃迄食料とするから、是非貯藏法を完全にして腐敗せぬ様に注意しなければならぬ。殆どに種諸の貯藏には一層注意しなければならぬ。貯藏しやうとする

諸は傷がなく健全なものを選んで、大小と別け附着せる土を除き、數時間空氣にさらし、外面の水分を去つたものでなければならぬ。暖地に行はれる最も簡單なる方法は高燥で樹木があつて、温度の變化が激しくない所を選んで、深さ三尺、幅二三尺、長さ適宜な坑を掘り、内側の周囲には麥稈の類を入れ底へはシダの類をしいて諸を容れ、麥稈を被ひ、其上に土を盛り、頂點を地面より一尺餘り高くして山形となし置くのである。

第十四 馬鈴薯の栽培法

(1) 選種と播種期 地方農家では馬鈴薯の栽培に就て餘り種薯の選擇に注意しない様で、却て使ひ残りの小粒のものを播下することもある様だが、それは甚だ宜しくない。さりとて大に失しても

不可ないが、種薯としては中等大で、其品種の特性を表して健全無害のものを選び用ゐるがよい。若し止むなく種薯の大なるものを用ふる場合には二三の鱗芽を残して適宜に切断して切口に灰を塗抹したのを播下するのである。播種期は春夏の二期で春播は三月下旬から四月月上旬の頃であつて、夏播は七八月の頃とする。

(2) 栽培 畑地は可成深く耕さねばならぬ。殊に重粘な土壤に栽培しやうとする場合には、秋一回春播く前に一回都合二回の耕耨を要する。整地が終つたらば畦二尺乃至二尺五寸位に條を切り、株間七寸乃至一尺位として、堆肥に少しく過燐酸石灰や灰を加へたものを肥料として與へて僅かに覆土した後其上に播種して二寸位の厚さに土を被ふのである。肥料は専ら元肥として植る附ける時に一回に施すが常である。若し水稲の裏作として作るや

うな場合には畦を作つて良く土塊を碎きて播種せねばならぬ。是れは排水を良くせんがためである。且つ寒冷の地にあつては、覆土した後尙ほ藁の如きものを敷いて寒さを防ぐべき方法を講せねばならぬ。斯様にすると大概二三週で發芽する。既に發芽して二三寸に伸長した頃、追々中耕と除草とを行ひ六寸の高さに至らば培土を行ふのである。又花の開く時より一二週間前に中耕土寄せを行ふのである。殊に培土は馬鈴薯にとつて極めて大切なことであるから、收穫前まで引き續き之を行ふて、薯の露出せぬ様に力めねばならぬ。

(3) 收穫及貯藏 播種期が二回であるから、従つて其收穫も勿論二回に行はれる。春播のものは六七月の頃、夏播のものは十月頃で地中に出來た薯が丁度其固有の大きさに達し皮が固く締り、薯と

本莖とを連ねてゐる匍枝が萎びて容易に切れる様になり、又地上の莖及び葉が黄色になつて來た時には此薯が成熟したのであるから、採掘して宜しい。採掘したものは兩日間乾燥した後暖かい室内又は暗室に貯へるのであるが、種薯として貯蔵する場合には殊に空氣の流通良好な場所を選択したならば一層よい。

(4)用途 昔は品種の不良と調理法の宜しきを得なかつたため、其用途もあまり廣くなかつたが、近來はそれが改まると共に需要が多くなり、或一部の者の如きは之を常食の補に當て又は多量の澱粉を貯蓄してゐるので、澱粉アルコールの製造に供したり、家畜の飼料に用ひなどする。

(5)品種 我國現在の種類は之を在來種と洋種との二に分つことが出来る。在來種に屬するものは白薯、赤薯、赤目、五郎八、甲

州等であるが、洋種に比べたら大に劣等といふの外は無い。然し此中にも甲州産のものは稍々良い方である。洋種には「シヤクソン、ホワイト」、コアトリ、ローズ、コアトリー、ガツド、リツチ、コレート、ローズ、コスノー、フレイキ」などは主なるものである。

第十五 芋の栽培法

(1)種類及用途 我國で栽培してゐる芋類には、通常芋と白芋との二類がある。通常芋は地中の莖が球状で其肉は白色で其球莖から葉が生じるもので、葉は楕圓形で多少三角形になつてゐる。此れは主に此球莖を食料とするのであるが、又葉柄も外の皮を剥いで乾燥させてズイキと云ふて食用とする。通常芋には青芋(通常種)

九面芋(ヤツガシラ)紫芋(唐の芋)、ズイキ芋、黄芋(縞芋又ハナ

イモ)など澤山の種類がある。

白芋と云ふのは四國、九州地方の暖かい地で栽培しているもので球莖は大きくないが其の葉柄は六七尺以上に達し。直經一寸乃至三寸にもなる。葉は心臟形であつて長さ二尺乃至三尺である。之は其葉柄を生で食し又は煮て食べるのである。

(2)氣候及土壤 芋は温暖で濕潤な氣候を好適とするから雨降り分の多い年には豊産である。又土壤は軽い肥沃の壤土がよいので水から、排水のよい地でしかも、時々水に浸される様な所がよい。(3)栽培 芋は大概大麥の畦間に植付ける。芋を作る爲めには大麥の作間を深く耕して置いて三月乃至五月の頃丁度芋の植付時にな

ると、畦巾二尺位、株間を一尺乃至一尺五寸位に大麥の間に溝を切つて元肥を施し、其上に種芋を直立せしめて植付けて土を蓋ふのである。種芋は成るべく形整正で豐滿健全なのを選んで、植付前貯藏所より出し三四日間太陽に當て發芽を促して植うるがよい。芽が出た時は中耕除草を行ひ又必要に應じて追肌もやるがよい。そして麥を刈り取つた後には刈株を鋤で耕起し畑地を整理するは勿論で中耕の時に次第に根際に土を寄せるのである。又水分が足らない時には澆灌する必要がある。肥料は頗る多量に要するものであることを注意して置くがよい。

(4)收穫及貯藏 收穫は十月乃至十一月であつて、霜を結ぶ前である。收穫する普通の方法は先づ葉を根際から切り採つて後に鋤で球莖を掘り採るのである。そして一反歩につき十石即ち四百貫

目位收穫すれば中作であつて六百貫以上であれば上作と云ふてよい。又收穫した芋を貯藏する方法は土地が高く乾燥して雨水の停らない所を選んで之に坑を掘る。坑は深さ三尺、巾二尺、長さは適宜とする。芋を貯藏するには此坑の底に粟稈の類をしき、芋を收納した後直に芋魁と子とを分けて日光に曝さず坑に入れる。そして芋魁は逆に並べ厚さ五六寸毎に粟稈を挿んで坑に満ちた時に更に粟稈で蓋をして土を家根形に盛り置くのである。

第十六 菊芋の栽培法

栽培法 菊芋はどんな土地にでもよく出来るから、他の作物に不適当な土地を選んで栽培することが出来る。此れを栽培するには春三四月の頃三尺幅の畦とし植溝を説けて、

此れに少量の堆肥を施し六七寸隔てに塊茎を種子として植を付けると、一二寸許り土を被ふせる。然る時は五月に至りて發芽するから、其後には一二回中耕土寄せを行へばよい。秋になつて莖が枯るゝ様になれば隨時掘り起して採收してよい。

第十七 玉葱の栽培法

(1)用途及品種 玉葱は近來可なり栽培が盛んになつて來た。従つて需要も廣くなつて來た様である。玉葱は貯藏に堪えるのと運搬に便なるとにより有望な野菜の一つである。此れは煮て食べるのが普通で、軟かで、味がよく、其上滋養に富んでゐる。玉葱は種類を別ちて白色種、黄色種、及び赤色種の三つとするのが普通である。

(2) 栽培は玉葱は床播にするのが普通である。苗床は暖かな所を選んで巾三尺、長さ適宜に作つて腐熟した堆肥を三寸厚さに入れ、其上に篩つた土を一寸厚味に載せ更に液肥を施して五分位肥土を入れて平坦として春二月下旬乃至五月上旬までに種子を撒播するのである。秋蒔は八月中旬乃至十月中旬までに蒔き付けるのである。種子を蒔き終はれば糞灰の如きものを施し少しく土を被ひ、更らに其上を糞稈などで被ふのである。十日乃至十四五日位立れば發芽するのである。發芽したならば被ひものを取り去るがよい。苗が二寸位になつたならば、間引きを始めるのである。六日位経れば小さい球が出来たら、此時大きい苗から漸次移植し始めてよいのである。本畑は丁寧に整地して、畦巾一尺四五寸、株間三四寸となして植ゑ付けるのである。又畦巾を三尺にして二

列に植ゑ付けてもよいのである。植ゑ付ける時は春蒔きのもは四月下旬より六月中旬頃までで、秋蒔きのもは十月半頃から十二月頃までに移し植ゑるのである。

移植の際肥料を施すものと、施さぬものがあるが、然し元肥として僅か許りの液肥の如きものを施すのである。肥料としては人糞尿、粕、厩肥、過磷酸石灰、灰などである。移植した後は除草や中耕を度々行ひ乾燥に失する場合には汚水の如きものを施すがよい。中耕を行ふ時は根際に土を寄せぬ様にするのである。(3) 收穫 春播のものは八月乃至九月の半頃に採收が出来る様になる秋蒔きのもは、六月中旬から已に採收に適するのである。收穫するには晴天の日を選んで行ひばよい、收穫後は乾燥に注意しなければならぬ。天日に凡そ一日間乾燥させ莖の萎びるのを待

ちて八本乃至十本を一束として横竿に架けて干かし、充分にかわいたならば根と莖とを切り去るがよい。

第十八 大豆の栽培法

(1) 用途 大豆の用途には色々あつて、味噌、醤油、豆腐、豆皮、納豆、菓子などの食料として用ゐられてゐることは吾人の知つてゐる所で、實に大切な作物である。此れは肉類の代りともなるので、昔から我國の僧侶が肉食を禁じて豆腐を主要副食物としたと云ふのと、畢竟豆腐は大豆から作つたもので肉の代りになる程滋養分に富んで居るからである。故に肉類の少ない地方では大豆を作つて副食物とするのは、非常に利益である。又肥料に豆粕といふものが廣く用ゐられてゐるが、此豆粕と云ふのは即ち大

豆から油を搾取した残りの粕であるので、支那や滿洲から盛に産出するものである。其油は食用にもし、燈油にも用ゐる。又近年縁肥として大豆を栽培することが盛に行はれる様になつた。即ち之を稻田又は桑園などに作り未だ成熟しない時に其儘此中に鋤き込み又は青刈りにして後には料とするのである。又青刈にしたものは家畜の飼料に供せられる。かやうに、大豆は數々の用途がある故に昔から米、麥に次いで大切な作物と見なされて五穀中の一つに數へられてゐる。

(2) 品種 品種の中で主なるものを擧げると次の様である。雁喰豆、碁石豆、鞍掛豆、生娘、千成生娘、銀白、白、黒、青、白玉、赤莢、白莢、目白、旭、毛裸、金大豆、瀧谷、裸、黄皮、水潜などである。

(3) 栽培 これを栽培するには極めて簡単であつて丁寧な整地を
するに及ばない。麥類や其他の作物の畦間に種子を蒔く場合には
單に唐鋤の類を以て畦間に穴を穿け、種子を下して土を被ふので
ある。特に大豆を作るために整地を行ふ場合には畦幅を一尺五寸
乃至二尺となし、株間は一尺内外にして一株につき種子二三粒を
蒔き付ける。然し大豆を青刈にする爲めであれば種子は三倍位餘
計に蒔き付ける。此れを行ふ季節は寒い地方では五月上旬から
六月中旬までに、又暖かい地方では三月中旬から七月上旬
までに種子を蒔き、九月十月に收穫するのである。肥料に就て注
意することは豆類には窒素肥料は無用であつて、只燐酸と加里と
を相當に施せば良い。種子を蒔き付けてから一週間位で發生する
から其後一二次の中耕と除草を行へばよい。

(4) 收穫及調製 收穫は十分に成熟した時に抜き採つて架に懸け
よく乾かし充分に乾いた時に豆を打ち落とし篩と唐箕とでよく調
製して尙ほよく乾かして貯藏するのである。

第十九 小豆の栽培法

(1) 品種 通常小豆には其葉の形状によつて丸葉、柳葉の別があ
る。又子實の大小及び其色の種々なるものがある。概して粒の大き
く、色の淡きを貴んでゐる。北海道には丸葉及び柳葉と云ふ二品
種が廣く栽培されて、我内地では大納言と稱する品種最も廣く栽
培される。此の種は大粒で淡い赤色である。此他品種の名稱少な
くないが其特性が一々明瞭でない。栽培法は前的大豆と略ぼ同じいから、別に記るさな
い。

第二十二 豌豆の栽培法

(1) 用途 豌豆には白花と紫花とあつて、白花のものは蔬菜豌豆と云ふて、莢の儘、又は種實のみを食用とするが、紫花のものは穀物豌豆と云つて、其種實が完熟した時に收穫して煮て食べ又は熱つて食べる。其他味噌、醬油にも澤山用ゐられる。又種實を家畜の飼料とすることは勿論のこと、又青刈にして飼料にし、又緑肥にすることもある。

(2) 氣候及土壤 豌豆は温暖な地方に適するが、然し又寒さに對して強いから、北海道などでも良いものが出る。土壤は砂質壤土乃至壤土を最も好むのであつて、乾燥で稍や膨軟なのがよい。

(3) 栽培 我内地では通常十月頃種子蒔きをするのであるが、北海道では春蒔きにする所が多い。畦巾及び株間は各品種に應じて丈高きものは之を廣くし、低いものは之を狭くする。通常畦巾は二三尺にして、株間は一二尺となし、一株に二三粒の種子を蒔き付けて、一寸位の厚さに土を破ふて踏壓けるが普通である。元肥として堆肥、過燐酸石灰、及び灰類などを用ゐる。一反歩に付いて燐酸一貫匁乃至二貫匁、加里一貫五百匁乃至二貫五百匁及び少し許りの窒素肥料を施すがよい。種を蒔いてから、十日許り立つと發芽するから、其後十三日位経つて中耕を行ひ、其儘越冬させる。そして翌春三月下旬乃至四月上旬になれば、大豆の如き肥料を施して中耕を行ふのである。總て豆類は毎年續けて作ると不作であつて彌地を嫌ふものである。特に作豆は甚だしいのであ

るから、毎年地を代へて作る必要がある。
(3) 收穫 蔬菜豌豆は莢の軟かい時に收穫する。豌豆は下部から漸次上部に向つて開花するから自ら成熟不揃である。六月頃七八部熟した時に抜き採り、十分に打ち落して調製するのである。

第二十一 蠶豆の栽培法

(1) 用途 我邦に於ては豌豆と同じ様に完熟並に青熟の種實を食用し、熟實は又味噌、醤油、菓子などに用ゐることがある。西洋では大粒のものは、専ら食料とし、小粒種は主として家畜の飼料にする。

(2) 氣候及土壤 蠶豆は同じく温暖な氣候を好むので、豌豆よりは一層温氣を好むので、熱帯地方に盛んに栽培されてゐる。土壤

は豌豆に於けるよりも重粘なのを良しとする。亦濕氣を要するこ
と稍や大である。故に乾田の裏作となして好結果がある。

(3) 栽培 種子を蒔く季節は暖かい地方は十月下旬乃至十一月中旬で、冬季寒い地方では三月頃が其適期の様である。畦巾を二尺許り、採間を一尺位となし、一株に付いて種子を二粒宛蒔き付けて、二寸位の厚さに土を被ぶせる。發芽後一尺位に生長した頃中耕を行ふのである。此れに用ゐる種子は豫め四五日間浸水して置いて發芽を催させるがよい。蠶豆は蔓がないから、支柱は無用である。

(4) 收穫 蠶豆は蔬菜用にするものは、青熟の時に收穫するのであるが、穀實とするにはよく種實が熟した時に、抜き採り十分に打ち落して調製するのである。

第二十二 菜豆の栽培法

(1) 用途 品種によつて異なるが、蔬菜用としては、嫩莢を採收して煮、又は子實のみを煮て食料に供するものである。又品種によつては子實を收穫して、菓子原料として用ゐられる。

(2) 品種 品種には種々あるが、重なるものゝみを擧げる。

(一) 札幌莢豆 一名於多福と云つて、北海道札幌地方の特産で多く栽培されてゐる。蔓は七八尺に達し葉は淡緑色で、花は白い。莢は緑色で長大、纖維多くつて食することが出来ないが、子實は最も肥大で、灰乳白色を呈して形状が扁平である。

(二) 朝菜豆 花は淡赤紫色で莢は緑色で、赤い斑があつて短大である。種實は中粒である。甚だ甘味に富んでるから砂糖莢

豆用として貴ばれる。

(三) 臺灣大莢菜豆 蔓七八尺に伸長し、葉は濃緑色で廣く大きい。花は白い。甚だ柔軟で甘味多く、莢菜豆中の最たるものである。

(四) 鈴成菜豆 莢は細長くつて、長さ三寸五分中二分餘りある。種實は球形で灰白色で、白大豆に似てゐる。此れは東京附近で最も多く栽培されてゐる種類である。

(五) 大莢菜豆 蔓は七尺餘りに伸長して多肉で、柔軟で、甘味多く莢菜豆中の冠たる者である。

(3) 栽培法 菜豆は肥沃な砂質の土地を好むものである。豆は四月頃に床に蒔いて苗を仕立て結霜の期が過ぎて畑地へ栽植する法と、四月下旬乃至五月頃になつて、畑地へ直播するものとある。

床蒔にするには特に高温を要らないから、少量の發熱材料を入れ、た床に種子を蒔き付ける。種子は二寸位を隔て凡そ一寸許りの深さに指で床の土中に挿し込んで置く。暫くして發芽して二枚の眞葉が充分に開いて結霜の期が過ぎたならば直ちに掘り採つて畑地へ栽植するがよい。直播するには品種によつて異なるが、蔓性種であれば、畦巾二尺、矮性種であれば一尺五寸位として播條を作つて此れに元肥を施し、蔓性種は一尺五寸、矮性種は一尺位の距離に二三粒の種子を蒔き付けて足で土を被て、凡そ一寸許りの深さに埋める様にして踏み付けて置く。凡そ一週間立てば發芽するから其後尙ほ十日位過て、追肥を與へ、苗の發育を促す様にする。其後尙ほ十日位立つて中耕土寄せを行ひ蔓性の者には支柱を立て、此れに纏ませる。

收穫は莢が充分に大きくなつて硬化ならない先きに漸次採收する様にする。

第二十三 枝豆の栽培法

(1) 品種 普通栽培用の品種は頗る多いが、枝豆として栽培されるものは數種に過ぎない。此れを栽培するには、五月上旬頃は整地をして、畦巾を二尺として、蒔き條を設けて菜豆と同様な元肥を施し種子を一二寸隔てに條播して足で土を被ふせて踏み付けて置く。そうすると約一週間立てば發芽するから、其後十日位過ぎて補肥として人糞尿を稀薄にしたものを施して中耕を行ふがよい。

(2) 採收期 採收期は品種の早晚に因つて異なるが一般に種子を

蒔いてから、後八十日乃至百日を経れば收穫してよい。

第二十四 刀豆の栽培法

(1) 品種 刀豆には特に品種として記すものがない。花の紅色なもの、白色なものとの二種あるのみで、白花種の方は莢は軟かで風味がない。

(2) 栽培法 床蒔の菜豆の如く床へ蒔いて苗を育て、畑地へ栽植するものと直播するものとあるが、孰れによつてもよい。畑地は堆肥、木灰、及び人糞尿などを元肥として施し置くがよい。距離は畦巾二尺五寸、株間一尺二寸とし之れに直蒔又は移植を行ふ。播種期は四月中旬頃で床に播種したものは一ヶ月で移植期に達する。生育中特に注意する程のこともないが、其の蔓の伸長

するに至つては、竹枝を立て其れに纏まらせる様にするがよい。

第二十五 茄子の栽培法

(1) 用途 茄子は極めて大切な蔬菜であつて、夏から秋まで長く續いて實を結ぶものである。煮て食べ又鹽漬にして副食物とするので其需用の高は實に多いものである。

(2) 土質と風 茄子の栽培に適する土地は、肥沃で少し濕潤である處がよい。水の餘り滯らない所でさへあれば、大抵の土地には出来るものである。畑地を選ぶときには風の當らぬ所を選ぶことは大事であつて、風當りが烈しい時は倒れる心配がある。若し風の當る地所であれば周圍に蜀黍又は王蜀黍の如き風を避け得べきものを植ゑ込んで置くがよい。

(3) 品種 品種は澤山あるから今其重なるものを擧げて見ると千成茄子、中成茄子、晩成茄子、巾着茄子、長茄子、白茄子、山茄子、清國大丸茄子、等である。

苗床 茄子は初め温床で苗を仕立て、後本畑へ植ゑ込むのである。温床は三月中旬頃南向の暖かい地を選んで巾六尺、高さ一尺七八寸、長さ適宜の藁圍を作りて、其中に落葉、塵埃や厩肥などを混ぜ、物を八九寸位堆積して其上に腐熟した堆肥を盛り更に土を載せて表面を平坦にして種子を播き付けるのである。床の温度は攝氏二十二三度がよい。そして種子を蒔いたならば木灰を混ぜた土を種子の見えない位に薄く篩で厚薄のない様に振りかけ、其上に細目の如露で水を注ぐがよい。發芽する迄藁で蔽ふて温度の下らない様にし、馬糞の乾いたものを揉んで薄く種子の上にかけれ

ば一層よい。かやうにして十三四日立つと發芽するから種子の上の藁を取り去つて日當りをよくすべきである。其後成長するに従つて草を院き間引きをなし、乾いた時はなるべく水を三四時頃に注いで四月中旬頃になつて五六枚葉が出来る様になつた時短かく太い強い苗を選んで本畑へ移植するのである。

(3) 栽培 茄子は大抵麥作の後地に作るものであるから、初め麥を蒔く時によく注意して二三尺の畦中に蒔き附けて置くがよい。四月中下旬に茄子の苗を麥の間に畦巾三尺乃至四尺、株間二尺乃至三尺位に基の目のやうに植ゑ付ける。麥の間に植ゑるのは移植の當時の寒さを防ぎ又苗が風のために、動くのを防いで生育に都合がよい。成育中は時々水を注いで除草と中耕と施肥とは怠つてはならぬ。中耕の際は土を根元に寄せ過ぎない様にして漸次に

よせかけ又風當の強い處であると支へ柱を立て、倒れぬ様にするがよい。苗を植ゑ付けるときは堆肥と過焼酸石灰とを混合した元肥と土とをよく混和して饅頭形の塊を作り其中に苗を植ゑ込むのである。

(4) 收穫 茄子を收穫するには朝早く露の未だ乾かない内に採べるきである日中に採ると水分が蒸發して色が早く變ると云ふおそれがある。又夕刻採つてもよい。

第二十六 西瓜、南瓜、其他瓜類の栽培法

(1) 用途 西瓜と甜瓜とは夏季生食するのである。何れも水分が多く甘味があつて、非常に美味である。然し南瓜は専ら煮て副食物として食べ、胡瓜、越瓜は生で酢に浸し又は鹽漬にして食ふの

であつて、何れも夏季に需要の多い蔬菜である。

(2) 土壤 西瓜及び甜瓜類は砂勝ちの地に適し砂勝の地に作つたものは果實は大きくないが水分が多くて甘味に富んでゐる。粘土勝の地に作つたものは収量も多く形も大きい水分が少なく甘味も乏しい。南瓜は之れと反對で、壤土又は粘土が最も上等である。しかし砂地にも出來、又大抵の土地にも出來るのである。

(3) 品種 品種の主なるものを左に挙げる。

(黄西) 黄西瓜(早生)、「アイス、クリーム」(晩生)、「マウンテン、コキート」(中生)、エキセルシヨル(早生)、内國大西瓜。

(南瓜) 縮緬南瓜、鹿ヶ谷、菊座南瓜、淀橋南瓜、西洋南瓜「ハツパート」。

(胡瓜) 早生節成胡瓜、中生胡瓜、清國大長胡瓜、晚生大胡瓜、

(越瓜) 早生越瓜、黒門越瓜、晩生大越瓜。

(4) 蒔木 西瓜は移植すると枯死し易いから本畑に直播きするが、南瓜及び其他の多くの瓜類は別に苗床を作る必要がある。其苗床の拵へ方は茄子と同様であるから茲では省略する。何れも攝氏十八度から二十二三度の温度に苗床を拵へ三月中旬頃種子を蒔く、七八日に發芽するから其後間引きし灌水をなし、五月上旬本葉が三枚位出た頃本畑に移し植ゑるのである。

(5) 栽培 西瓜は麥の後作にするが普通で六尺位の間隔を置いて點播にする。其のために麥の作幅を二尺とし三作毎に一作を殘しあけて置く必要がある。春三四月頃に其空地をよく耕し、株間六七尺宛隔て、西瓜の種子を蒔き付ける。普通は八十八夜頃種尺を蒔くのであつて、蒔き付ける前一晝夜水に浸した後布片で包み

秋冬の葉などにて二三重に包んで更らに馬糞や、しき糞、塵芥などの醗酵して熱が出てゐるもの、中に一晝夜入れて置くのである。然る時は速かに發芽して根がよく出来るのである。種子を蒔く時は孔をあけ元肥を施し其中に一株に種子五六粒乃至十粒位蒔いて糞を被ふせて置く。發芽すれば上の糞を除去し本葉が二三枚抽出した時間引いて一本立てとするのである。發芽後一月に一二回宛薄い人糞尿又は油粕を株の間に施すがよい。かくして本葉が四五枚となつた時に心を摘み切つて勢の強い腋芽を二本發生させる。此時に止肥を與へる。花が咲いてから大抵四十日経ると果實は成熟する。

南瓜は苗床で苗を仕立てる。五月上旬頃に本葉が三枚位出た時に本畑へ植ゑる。其時の畦巾は六尺、株間は三尺位にする。之

を植ゑるには深耕して元肥を施し、其上に土を少し被ぶせて苗を植ゑる。其後は畦の間を耕し補肥を施し少し蔓が出来た時に地面一面に麥稈をしきつめ、又心を摘みとる。胡瓜も苗床にて苗を仕立て四月から五月の間四五枚の葉が出た時に本畑へ植ゑる。本畑はよく耕起し畦巾二尺五六寸から三尺位とし、株間を一尺四五寸となし、株毎に支柱を立て、肥料は植ゑ込みの時に堆肥、油粕、過燐酸石灰、木灰などを元肥として施して植ゑ込んでから七日位後に第一回の追肥を與へ其後一尺位に伸長した時に第二回の補肥を施すので補肥は人糞尿である。移植後數日間は藁束で日覆をして置くがよい。甜瓜及び越瓜の栽培は苗床で苗を仕立て本葉三枚位出来た頃本畑へ移植するのである。そして蔓の心止めをするが大切である。心

止めは本葉が三四枚出た頃二葉を残して心を摘みとり二葉の間から二枚發生させ此枝が伸びて五枚の葉が出来た時更に四枚のこして二枚共其先端を摘みとる故に一枝から四本の枝が出る様になるので之を八本蔓と云ふ。八本蔓が伸長して果實が結つた時其より一葉上で心を摘む。肥料其他の手入はすべて西瓜と同様である。(6)收穫 西瓜を收穫せんとするには、西瓜が果して成熟して居るか否かを先づ鑑別しなければならぬ。西瓜は花が落ちてから四十日立つと熟するのであるから、落花した時に日附をした札を付けて置くがよい。又指で西瓜を打つて見て、其音が水氣の充滿した如く濁つた音がする時は成熟した印しである。南瓜は落花後三十五日乃至四十日立つた時果實の表面に粉が出来て赤色を呈した時に收納すればよい。

胡瓜は果實が可なり大きく成長して柔かな時收納するので朝か夕方方に採收する。
甜瓜及び越瓜は落花後四十日頃に成熟するから、熟した時はよく香を發し、果梗に近き部分にさけめが出来るから此時を見計つて採收するがよい。

第二十七 茗荷の栽培法

(1) 用途 茗荷は本邦特有の蔬菜であつて、廣く各地に栽培されてゐるもので、花菜として、花蕾を採收して食料とする。此の蔬菜は只に花蕾を食用とするばかりでなく、嫩芽をも茗荷だけと稱して種々の調味料に用ゐられる。就れも一種の香氣があつて風味がよい。

(2) 栽培法 茗荷は陰地で稍や濕氣を含んだ土地に最もよく繁茂生育するものである。此れを繁殖させるには、種子を生成しないから、専ら株分に依るのである。即ち古株を掘り起して塊莖を數片に切斷し、各片に一個の芽があるものを苗として植え付ける。植付けるには先づ整地を行ひ一尺隔てに植溝を設け、堆肥を一歩に凡そ二白五六十貫匁許りの割合にて施し苗は一尺隔て位に配置して二寸許り厚みに土を被ふ。苗を植付けるに適當な季節は四月月上旬であるが、地方によつては四月中下旬に行ふ。苗の植付け後は雜草の繁茂する状況によりて一二回除草を行ふ。而して栽植の年には採收しないで株を充分に繁茂蔓延させる。秋末になつて莖葉漸次黄色を呈し枯死するから此の期になつたならば、落葉或は塵芥などを株の上に撒布して株を保護すると同時に營養

分を與へる。右の如くして越冬させる時は翌春になつて花蕾即ち
茗荷ノコ及び嫩芽が發生して來る。故に肥大なる花蕾及び嫩芽を
採收せんとするには發芽前三寸位の厚みに塵芥を撒布し置くがよ
い。花蕾は發生後適當の大きさに達したならば直ちに收穫するので
ある。嫩芽も地上に抽出して長さ三四寸に及んで葉の尙ほ開かな
い前に採收するがよい。

第二十八 土當歸(獨活)の栽培法

(1)用途 土當歸は廣く各地に栽培されて、需要の多い重要な蔬
菜の一つである。山野に自生するものがあるが、品質が良好でな
く、且つ香氣が非常に強い。培養したものは、香氣が野生してお
るものに及ばないが、品質は却つて良好である。

(2)品種 土當歸の品種は多くないが、其主要なものを列記すれ
ば次の如くである。

(一)寒土當歸 一名赤芽土當歸と稱して早生種である。十二月
の寒中に發芽を催する。故に此名がある所以である。芽が赤く
つて莖身肥大である。香味、品質が共によい。

(二)白土當歸 關東地方に廣く栽培されてゐる。晩生種で、莖
身長大で品質もよい。

(三)節赤種 晩生種であつて、各節赤色を帯び、風味佳でない
が、收量最も多い種類である。此の他品種として江戸町早生、與右衛門種、桑名屋種、庄兵衛
種などがある。

(3)繁殖 繁殖法には實蒔、株分、芽挿などの諸法があるが、一

般に實蒔、或は株分の法によつて、繁殖させる。然し實蒔法は種子を蒔いて收穫するまでに、兩三年を要するから、株分の法によるのが普通である。株分法は秋繁茂した古株を掘り起して、刃物で數片に切り離し、直ちに苗として用ゐる。

(4) 栽培 土當歸を栽培する仕方は種々あるが、一般に行はるゝ一二の方法を示さう。
本圃に植付ける時期は寒い地方と、暖かい地方とによつて多少の差があるが、凡そ十一月の中下旬になつて、日當りのよい、排水の可良な場所を選んで、巾二尺五寸、深さ二尺五六寸乃至三尺位長さは適宜であるが、先づ二間位の溝を掘つて植付の準備をするがよい。用意が出来たならば、發熱させるために、厩肥、或は木灰などを入れてよく踏み付け、凡そ二尺許りの厚さになし其上に

肥土を三四寸の厚さに入れて苗を植付ける。苗は二三寸の距離とし肥土の上にならべ、其上に一寸位の土を被ぶせる。更らに粗殼或は落葉の様なものを、一尺許り堆積して其上に少し許りの土を盛つて、粗末な屋根を設けて置くと、普通のものよりも、早く二月頃脆く軟な良質のものが出来る。

又春二三月の頃になつて、上述した場合と同様に日當りのよい暖かな排水の良好なる地所に、深さ三尺、巾二尺五寸内外、長さ適宜の溝を掘つて、其底には少量の堆肥に木灰及び米糠の少し許りを混ぜたものを六七寸許入れ、更らに其上に肥土一寸位置き、三四寸隔てに苗を植付けて、三四寸位土を被ぶせて、片屋根を設けて設くと、三四月頃になつて、發芽して來るから、少量宛數回に土を切り懸け、嫩芽の長さ一尺五寸内外に達すると、適當の大き

に伸長したものから順次採收してよい。

第二十九 落(欵冬)の栽培法

(1) 品種 落は各地に自生してゐるものを採收して、食用とするが、然し昔から廣く栽培されてゐる。品種の如きも多くない、秋田落、北海道、秋田其他東北地方に自生して、葉及び莖が甚だ大で秋田地方に於て栽培されるものは、最も有名である。此品種は葉柄を採つて蔬菜とし、又は砂糖漬等の如きものを製するに用ゐられる。水落は一名山路と稱して、莖は淡綠色を呈し、葉は甚だ太からず、又高くもない、柔軟であるから、食用として、最もよい。八つ頭落 赤色を帯びてゐるから、赤落の名がある。品質良好でないが、花蕾を生ずる事が他の品種よりも遙に多いから

花蕾採收用として廣く栽培されてゐる。

(2) 栽培 此れを繁殖させるは、常に株分によるものである。初めて落を栽培しやうとする時は、畑地は豫めよく深く耕し、多量の堆肥を鋤き込んで、之れに二尺の畦中に一尺の距離を保たせ二三芽を有つてゐる種株を栽培し置くのである。植付の適期は地方によつて多少異なるが、凡そ五六月の頃である。植付後は勉めて雑草を除き、株を充分に繁茂させる。秋の末になつて、葉が枯れる様になつた頃、堆積肥料を株の上に撒布して防寒を兼ねて肥料とするがよい。翌春になつて再び株の上に充分に腐敗した堆肥を撒布し、此れと同時に多量の人糞尿を施して置けば肥大な花蕾が出来る。花蕾が地上に顯はれ開かない先きに採收するがよい。葉柄を採收するには、充分の大きさに達せば組織尚ほ粗剛とな

らないうちに、收穫しなければならぬ。さうして莖を採收する目的で作つたものの花蕾を採收すると葉の發育が不良となるから採收しない方がよい。
右の様にして栽植栽培したものは年々よく繁茂するが、五六年を経れば株が漸次衰へて來て收量も減少するから五六年目位に一度全部を掘り起して古株を捨て更に新株のみを植え付ける様にしなければならぬ。

第三十 蓮根の栽培法

(1) 用途及品種 地下莖即ち俗に云ふ根は煮て食べるのが普通で砂礫漬又乾燥して食し、或は澱粉を製造することもある。花は切花として大に貴ばれてゐる。蓮根は昔から栽培されてゐるが、品

種は多くない。重なるものは次の様である。

(一) 白花種 これは關東地方に多く栽培されて、色は純白で花も白く、風味がよい。

(二) 紅花種 此種類は地下莖が土中に深く入る性質があつて採收に困難である。花は名の如く紅色で、肉は軟かで風味がよい。
(三) 支那種 此れは明治八年に支那から傳はつたもので、白色のものゝ紅色のものがある。我國では白色のものが多く作られてゐる。肉は軟かで厚くて味は悪くない。

(2) 栽培 此れには實蒔き法と、苗を植え付ける法と二つがある。苗を植えるには三四月頃栽植すべき所を深耕して灌水し、畔塗りをして、苗代田の様にシロカキをなし、人糞尿を施して蓮田を作つて、六尺隔きに巾三四寸、深さ一尺位の植溝を設け、根莖

を溝に沿ふて水平に置き、六七寸許り土中に埋めて置く。株間は三四尺位離して置くのである。此の栽植の時は五六分乃至一寸位灌水して行ふのである。此れに用ゐる根は無傷でよく發育した先きの二節を用ゐる。栽植した後は三寸許りの深さに水を灌漑し、漸次其深さを増して一尺位に保たせて置く時は、五月の半頃になつて芽が水上に出るから、此の時に水田の除草を行ふ様に水を排除し、除草を行つて株の間をよく攪拌して根莖の發育を促す。除草が終はつたならば、もとの如く水を注ぐのである。かくして夏土用になれば水を少し減らして、雑草の繁茂の模様によつては、一二回の除草を行ふがよい。以上の様にして置けば、七月下旬から順次採收が出来る様になるのである。

(3) 收穫 七八月頃になれば採收が出来るが、適當な大きさになる

のは九、十月の頃であるから、此頃から收穫し始めて、翌年四月頃までに漸次採收するが普通である。

第三十一 慈姑の栽培法

- (1) 品種 主なるものを左に擧げる。
- (一) 青慈姑 廣く栽培される種類で球莖は中形で濃い藍色を呈してゐる。香氣が強く、甘味がある。
- (二) 白慈姑 清國の原産で球莖は大きくつて、色が白。質が稍や硬くつて苦味がある。豊産であるから廣く栽培されてゐる。
- (三) 吹田慈姑 京阪地方に廣く栽培されて球莖は甚だ小形で、甘味に富んでゐる。
- (四) 烏芋 外皮は黒色を帯びてゐる。煮食に適しないが生の饅頭

皮を剥いて食すれば蔗糖の様な甘味がある。

(2)栽培法 慈姑は蓮根の様に深い土地を要しないが、湿地を好んで繁茂する。之れを栽培すべき田は冬季の間、水稲の跡地をよく耕起して堆肥、人糞尿などを施し置き五六月の頃になつて、掘り取つた種薯を栽植する。栽植距離は品種により、又土地の肥瘠によつて異なるが、普通畦巾は凡そ二尺乃至三尺とし株間を二尺位にして植付ける。慈姑は元來餘り水の深いのを好まないから、始終二寸位の深さに灌水して置く。栽植後約一ヶ月を経れば、水を排除して蓮田と同様に除草を行ふがよい。又苗の發育の模様によつて、追肥を施すがよい。追肥を施さそうとするのは水を排除して一面に撒布し、然る後、表土を攪拌して之を混入るものである。

(3)採收 晩秋十月の頃から莖葉が枯死し始めるから、翌年發芽期までの間に採收するがよい。けれども其の間は失して水を乾涸せしめてはならぬ。

之れを貯藏するには窖孔内に投入し置くか、或は濕潤な砂の中に埋めて置くがよい、茲に注意することは、貯藏所を乾燥させると慈姑の品質が劣悪になることである。

第三十二 水芹の栽培法

水芹は各地到る所に自生してゐるから、世間では此の自生してゐるものを採採して食べてゐるが、然し培養したもののは其香氣は野生のものに及ばないが、大きくつて品質が上等である。水芹は自生してゐる野生種と、培養して出來た培養種とがあつて、特に記

すやうな品種はない。
水芹を栽培するには三月中旬頃に古い親株を掘つてよく洗滌し先づ二尺位の厚さに堆積して、少しく濕り氣を興へ、蓆を被ぶせて置けば、一週間位で根の各々の節から芽が出るから、此れを二寸位の長さに切斷して此れを種として水田に耕植する。植え付ける水田は三月下旬に苗代田と同様によく耕し、多量の青草と人糞尿とを施して、地面を平坦にし之れに苗を粗密のない様に撒布するのである。其後は苗が乾燥しない爲に淺く灌水をなして置いて根付きを容易ならしめる。苗を栽植した後も數日で發根して生長を始めから、常に株の半分位の深さに水を注いで置くのである。又發育の状況によつては水を排去して、魚肥又は人糞尿などを施して時々除草をする必要がある。

採收は十月中旬頃から順次行ふものであるが翌春三月の彼岸頃までに終へる様にすることがよい。

第三十三 蒟蒻の栽培法

(1) 用途 蒟蒻は地中に球形をなした莖があつて、之を薯と云ふて此薯から春季一本の莖が地上に抽出する。地中の薯は春から秋まで絶えず澤山の子薯を作つて繁殖するが、地上に出た莖は毎年秋の末になると寒さで枯れてしまふ。蒟蒻を栽培する目的は此の薯を採るので此薯から食用の蒟蒻や凍蒟蒻を製造し或は糊などを作るに用ゐられる。

(2) 繁殖 蒟蒻薯は數個の小さい子薯を生ずる性質があるから此小さい小薯を離して種薯として本畑へ植ゑるのである。種薯を作

るために、特別に種畑を設備することがあるが又本畑から薯を収穫する時に子薯を分離して種薯とし或は年々種薯を他から買入れ

て作る。種畑を作るには肥沃で南方又は西南に面した傾斜して冬は暖かで排水良好な地を選んで春四五月の頃整地して種薯を植付ける。夏の間は株間に多量の刈草をしき強烈な太陽の光熱をさへぎり又土地の乾燥せぬ様にするのである。其後中耕除草を行ひ一二年立ちて充分に繁殖する。そうなれば毎秋就中大なる薯を選んで採取して本畑に植えるのである。本畑一反歩に對して要する種畑の面積は普通は七八畝で、良好なものは五畝歩で充分である。種畑より採集する種薯は二年生若くは三年生で直径が二寸乃至二寸五分内外のものがよい。種薯の掘り取りは秋になつて寒さのため莖が

枯れた時に莖の大きなものを選んで唐鍬の如き「カナカキ」と云ふもので掘り出すのである。

(31) 種薯の貯藏 種薯を貯藏するには暖かな地方では簡単に出来るが、寒い地方では手数がかる。冬に暖かい地方では南方に面した高燥な崖際に深さ二三尺の孔を掘り茲に薯を積み入れ最も上層のものだけは特に芽を下にして伏せ、其上に土を三寸位被ひ置くのである又薯を一重に列べては其上に土を被ひ又其上に薯を一重列べ土を被ふやうに土と薯とを交る層を作つて埋めることもある。然し極く寒い地方にあつては薯は家内に貯へるのであつて最も簡単なのは住家の天井に薯を一重列べる又粗末な土蔵を作つて其二階の床は丸竹を列べて作り其上に薯を一尺位積み下で粗穀などを燻べて暖める。又爐の上八九尺の所に丸竹で棚を作り

薯を箕に入れて其上に置く方法もある。

(4)栽培 植付の時期は四月の初より終りまでを普通とする。畦
巾を二尺、株間を一尺五寸とし唐鍬で深さ三四寸の孔を穿ち種薯
を置き土を一寸五分位被ぶせる。薯は少し南に傾けて植付けるが
よい。直上に向けると芽の周囲の凹所に水分が停滞して病を起

すからである。

肥料は廐肥、人糞尿を主にしてこれに大豆、大豆粕、菜種の碎
たもの、菜種粕、鱈粕、木灰などを併せ用ゐることもある。一反
歩に就て人糞尿であれば百貫許り廐肥である二百五十貫位を
用ふる所が多い。植付の際は繁忙であるから、肥料を施さないで
植付が終つて後之を施すが普通である。
そして肥料は種薯の下に與へないで、却つて上に與へる。肥料を

薯に觸れる様に與へると病害を惹起し易い故に原肥を施す場合に
は先づ種薯に土を被ひて然る後之を施すを法とするのである。

(5)收穫 十月中旬より十一月に至り寒氣によつて莖葉の枯凋
するのを待ちて行ふを適當とする。そして「カナカキ」と云ふもの
で、丁寧に傷附けない様に掘り採るのである。

(6)製粉 蒟蒻は生の儘で賣ることもあるが、大抵は粉にして賣
り出す。生薯より製粉する順序として先づ荒粉なるものを製すこ
れを製するには先づ竹籠で薯の芽を除き桶に入れ洗棒を以て摩擦
洗濯し、次に陽乾し水を去り鉋で二分乃至二分五厘に削り之を多
敷二尺五寸乃至三尺位の細き篠竹に貫き日光のよく當る風通り
の良い所に懸けて乾かす。一週間位乾かせば充分である。かくし
て得たものは即ち荒粉である。次に荒粉をば米搗臼に入れて粉末

に碎き箕を以て糟粕を飛ばし後に俗に「コナマン」と云ふ蒟蒻粉を得るのである。

一坪で
出来る
蔬菜栽培法 終

大正六年七月十日印刷
大正六年五月五日發行

定價金貳拾錢

編輯兼 河合 龜
發行人 東京府豊多摩郡澁谷町下澁谷三十五

印刷人 海老根 義昌

發行所 東京下澁谷廣尾橋通
カワイヤ

發賣所 東京市京橋區松屋町一ノ二
大正堂書店

電話京橋三八六三
振替東京三九〇三七



化粧用石鹼にして
原料に不純物を含まざる

カワイヤ石鹼

一個入	十三錢
三個入	三十七錢
六個入	七十四錢
一打入	一圓四十錢

御試用願上候

本品は他の同質石鹼の如く新聞に雑誌に大々的
廣告を爲さる故全く製造原價丈故に安價にして
真品なり

東京 一個にても
市内 無料配達
地方 送料無料

東京下達各廣尾橋通り

製造賣元

カワイヤ

總發東京二八二五六

終

